

金沢大学英文学会 *The Society of English Literature, Kanazawa University*NO. 8 *NewsLetter*

2017. 1. 1

★金沢大学英文学会は、1953 年 1 月第 1 回卒業生の予餞会で結成。年 1 回総会と講演会・研究発表会を開催、学会誌 *KES* は 1954 年創刊、現在 29 号を数える。

会員のみなさま、お変わりございませんか。NewsLetter 第 8 号をお届けします。本年度の運営委員会がさる 8 月 6 日に開催され、本号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

=====

英語の先生か英国の先生か

中村 芳久

2017 年(3 月)は、定年退職の年である。1988 年(平成元年の 1 年前)に赴任していつの間にかほぼ 30 年が経つが、同僚の先生方の寛容さ、英文の卒業生・院生・在学生のみなさんとの豊かな交流のなかで、じっくり学問をやれたように思う。中学のときの卒業の一言は「努力に勝る天才なし」だったようで、「北陸中日新聞」の卯年の「きょうの運勢」は「その道において他人の倍の努力を為せばその道の達人となる」とある。あまり気にしなかった努力や運勢だが、*Ars longa, vita brevis*。運も味方につけて、そろそろ本気になろうかとも思う。*KES* も NewsLetter も、代表としての 8 年間しっかり楽しませていただいた。以下は「門出」の文章としていただければと思う。

英語に *English teacher* という表現があって、＜英語の＞先生か＜英国の＞先生かが、紛らわしい。英語にちょっと詳しい方なら、*English* に強勢があれば、英語の先生で、*teacher* に強勢があれば、英

国の先生だということをご存知かもしれない。さらに、英語の先生の *English teacher* は一語であり、英国の先生の方は「形容詞＋名詞」の二語だということまでご存知なら、相当の英語通だ。しかし、なぜ＜英語の＞先生の場合は一語で、＜英国の＞先生の場合は二語か、ということになるとどうだろうか。

このことが今世紀の 2 大文法理論である生成文法と認知文法との急接近に関係があるとしたら、ちょっとしたこともかもしれない。

話しは生成文法以前のアメリカの構造言語学までもどるが、この構造言語学は、言語の表層構造に執着して言語を説明しようとするから、構造言語学は、同一の *English teacher* が二つの読みを持つことを説明できない。そこで Chomsky の変形生成文法の登場ということになるのだが、その切り札が「深層構造」だ。英語の先生の *English teacher* の深層構造は、*teacher of English* で、英国の先生の場合は *teacher from England* であり、このように深層構造が違うから、意味が違うのだ、というわけである。

さらに、二つを組み合わせ、「英国の英語の先生」と言おうとすると、

Teacher [of English][from England]

であって、

XTeacher [from England] [of English]

という組み合わせはダメである。これからすると、*teacher* と *of English* の結びつきが強く(その間に *from England* が割り込めない)、*teacher* と *from England*

との結びつきは弱い（だからその間に of English が割り込める）。つまり、結びつきの強い teacher of English という読みの English teacher は一語で、結びつきの弱い teacher from England という読みの English teacher は二語だというのだ。二語の方は「修飾語＋主要語」の関係があり、主要語に強勢が来る。それと差異化するために一語とみなされる方は、最初の語に強勢が来る、というわけである。

これで一件落着かという、そうではない。その後、生成文法は MP（ミニマリスト・プログラム）という全くよそおいの異なる研究プログラムを展開させるのだが、その MP が English teacher のような現象をどう分析するのか見てみると、けっこうラネカー（Ronald Langacker）の提唱する CG（Cognitive Grammar 認知文法）に接近する。のだが、さて、MP と CG の急接近の詳細とその顛末予想は、また別の機会に、ということで、ご期待いただければ幸いである。

=====

2016 年度金沢大学英文学会 総会プログラム

日時：2017 年 1 月 21 日（土）

第 1 部 10:20～12:30

第 2 部 13:30～17:30

会場：金沢大学

人間社会第 1 講義棟 3 階

301 講義室

（連絡先：076-264-5344）

総会第 1 部 研究発表会 (10:20～12:30)

10:20～10:50 石垣 恵一（M2）

「‘over lunch’に見られる over の従事用法の認知言語学的考察」

10:50～11:20 山田 美紀（M2）

「Have you ever ~? と Did you ever ~? の使用傾向の違いについて」

11:20～11:30 休憩

11:30～12:00 廣田 篤（D3）

「No more A than B 構文とレトリック性」

12:00～12:30 茶谷 丹午（D1）

「ラフカディオ・ハーン『人形の墓』の解釈について一和辻哲郎の倫理学を手がかりに一」



総会第 2 部 (13:30～17:30)

13:30～14:10

開会の辞 中村芳久会長

総会 1. 役員の改選

2. 会計報告

3. 会の活動報告

4. その他

14:10～14:20 休憩

14:20～15:10

在学生による留学報告

斎藤真友さん、山田美紀さん

15:10～15:30 休憩



15:30～17:00 講演

「英語教育と最近の英語学」

中村 芳久

(金沢大学英文学会長)

17:00 閉会の辞 谷内輝雄副会長



18:00～20:00 懇親会

会場：金沢大学北福利食堂

会費：3,000 円



《近況》

★Modern Jazz Society

4 年 松原 由美

わたしは大学一年の春から大学三年の冬まで modern jazz society というジャズサークルに所属し、テナーサックスを演奏していました。大学入学まで管楽器を演奏したことはありませんでした。ですが、大学入学を機に何か新しいことに挑戦したいという思いがあり、様々なサークルや部活の活動を見て回っていた際に、熱い演奏に惹かれて入部しました。

サークルのメンバーの大半は金沢大学の一年生から三年生で構成されていますが、中には他大学から練習に参加しているメンバーもいました。演奏メンバーは固定ではなく、曲ごとに入れ替わるため、曲によって演奏のカラーが変わり、わたしたち演奏者にとっては毎回異なる会話を楽しむというようなシステムになっていました。

わたしたちの活動は、学内だけでなく、学外やさらには県外でも行われました。活動の中には、ジャズミュージックを演

奏する他団体の方と合同でライブを催す機会が多々ありました。時には、自分よりも一回りも二回りも、さらにはそれよりずっと年上の方と一緒に演奏したり、反対に自分より年下の子供たちと演奏したりすることもありました。さらには国の違う、言語の異なる方と演奏する機会もありました。そのような機会を通じて、音楽は言語を用いないコミュニケーション手段のひとつだと身をもって感じました。

演奏者が気持ちをひとつにして音楽をつくりあげる際にはもちろん、演奏者の音楽に対する熱い気持ちや、作曲者の曲にこめた想いを汲み取るときにも音楽を通じて交流・会話がされているように感じました。実際に演奏をしている際に、主旋律を奏で、バンドをリードしていく演奏者の意図を汲み取って、気持ちを寄せていくことが幾度とありました。音楽を演奏する中でそうしたやりとりを重ねてきたために、三年間ともに演奏してきたメンバーたちと深い絆が築かれたのではないかと感じています。

はじめは分からないことや出来ないことばかりで涙を流してしまうこともありましたが、周りに迷惑をかけたくないという気持ちで辞めてしまいたくなることもありました。それでも最後まで演奏を続けることが出来たのは、練習すればするほど出来るようになっていく面白さと、一緒に音楽を演奏することで様々な人と交流できる楽しさに魅了されたからだと感じています。来年には大学を卒業し、社会人となり、音楽に関わる機会は減ってしまうかと思いますが、何らかの形で音楽に触れ、さらにはだれかとともに演奏する機会を設けて、言語を用いないコミュニケーションを享受したいと思います。

★近況報告ー留学生係の仕事ー

平成 25 年度卒業 木谷 真理子

先日、中央図書館にある「ほん和かふえ」で中村先生と研究室の先輩がディスカッションされているところに偶然通りかかり、思わず声をかけました。学生時代によく通った図書館で久々にお会いした方々を前に、研究室での日々がよみがえり、懐かしくなりました。

私は、2 年前に英文研究室を卒業し、金沢大学の事務職員として働き始めました。そして今年の 4 月から留学生係に配属され、現在は主に留学生の受け入れ業務を担当しています。慣れないことばかりで戸惑うことも多いですが、毎日が刺激的です。窓口に来て、一生懸命に日本語で話しかけてくる留学生たちと接しているとエネルギーをもらえます。

今週は、本学の協定校であるタフツ大学（アメリカ）から職員交流の一環として事務職員の女性が来学し、私は一週間、彼女のアテンドをすることになっています。以前、タフツ大学の男性職員の方々が本学を訪問された際に、本学職員とのミーティングがあり、私も参加したのですが、最初の挨拶はなんとかできるものの、本題に入ると相手の話を全く聞きとることができませんでした。私以外の人たちがうなずき合い、時にはジョークで笑い合ったりしている様子を見て、自分だけが取り残されている感覚に陥り、焦りが募りました。そんな私にとって、今回の女性職員来学時のアテンドは緊張と不安もありましたが、一方で前回の苦い経験を克服するチャンスでもあって臨みました。

彼女はこの一週間、複数の職員や研究者とミーティングをすることになっており、私は生の英語に慣れたい一心で、できる限り同席するようにしています。彼女の隣にいて気付いたのは、コミュニケーションに必要なのはリスニング力や

スピーキング力だけではないということです。最初は「できるだけ英語を聞きとろう、リスニング力を鍛えなければ！」という思いで同席したのですが、実際は、英語そのものよりも彼女の表情やリアクションに意識が引きつけられました。初対面で最初は構えているような相手でも、彼女が話しはじめてしばらくすると、相手の表情がずっと和らいでいくのが分かりました。そこから先は自然と会話が生まれ、気づいたらあっという間に時間が経っているのです。彼女の話し方には、相手と心を通わせようとする姿勢が表れていました。相手の目を見ながら、ひとつひとつ確かめあって会話を成り立たせていたのです。これは、彼女と行動を共にして学んだことのひとつです。今後は、語学力を高めることはもちろんですが、相手と気持ちを通わせることを第一に考えて英語と向き合っていこうと思います。

明日は金沢の街を散策する予定です。どこに案内したら喜んでもらえるか考えているうちにわくわくしてきました。

★頑張ってます

H16 年度卒業 米光 綾

大学を卒業し、社会人になってから 12 年が経ちました。入社した頃は取引先の方々から「あの子は泣きそうな声で話している、大丈夫か？」と心配される程か弱かった私も、今ではドスのきいた声を出せるようになりました。（つもり）

私は卒業してからずっと損保会社の自動車事故対応部門で働いています。事故の示談交渉から保険金のお支払いまでをする部署で、担当者は何十件もの事故を同時進行で担当しています。年次が上がるにつれて責任も重くなり、グループを統括して、決裁をしたり苦情対応をしたりという、いわゆる中堅管理職の仕事もしました。（こういう時にはドスがきいてなくても落ち着いた深みのある声が必要

要になります。) 昨年4月には北陸3県の事故対応部門を統括する部長の直属の部下に抜擢(?)され、現在は北陸全体の人財育成を担当しています。か弱かった(はず)の私がかわいい新入社員の研修をしたり、所長を含めて先輩方へも様々な指摘をしたり、部長の秘書のような仕事をしたりしています。部長は男性ですが、映画「プラダを着た悪魔」のミランダのような人物で、無理と思える指示をバンバン出してくれます。主語がなくても何の案件のことを話しているか瞬時に判断して答えなければならず、見当外れなことを言ってしまうばたちまち目つきが鋭くなります。いかに先回りして情報を頭に入れておき、部長の思考回路に合わせた判断に結び付けるか毎日必死です。部長はアメリカ勤務が長かったこともあり、北陸に英語で事故対応ができる人財を育成するとの目標を掲げたプロジェクトチームを立ち上げ、なぜか私がリーダーに指名されてしまいました。入社してから今まで全く英語が必要ない環境で仕事をしてきましたが、ここへきて大学時代に勉強したことが活かされています。先日は上半期の活動報告をする機会があり、半分は英語で発表しました。大学時代のスピーチコンテストを思い出しました。

プライベートでは旅行が好きで、国内・海外を問わず、1年に1~2回楽しんでいます。昨年の秋には知床一人旅をし、3泊4日ひたすらレンタカーで走ってきました。まるで空に向かって道が続いているかのような素敵な場所もあり、とても癒されました。2年ほど前には大学時代に短期留学をしたオーストラリアに一人旅をしました。とても懐かしさを感じる反面、あまりに物価が上がっていて驚きました。今後も仕事の息抜きに色んなところへ旅行したいと思っています。

★私の近況

平成19年度修了 劉 斌

みなさん、こんにちは。2008年、人間社会環境研究科(認知言語学)を卒業しました劉(リュウ)と申します。よろしくお願ひいたします。

気が付いたら、社会人になって、あつという間に8年半が経ちました。今回、news letterのコーナーを借りて、一卒業生として、私の今までの経歴を紹介させて頂き、少しでもみなさんの参考に出来るような内容があれば幸いです。どうぞ、お付き合い下さい。

就職活動の時、「興味があつて、自分との相性も良く、そして、社会に貢献できる」仕事は何だろうと悩んでいました。なぜなら、好きでなかったら、長く続きそうにないですし、自分の強みを発揮出来なければ、やり甲斐を感じず、楽しくならないからです。パソコンが趣味で、物作りも好きな私は、3ヶ国語を話せるので、商社か、メーカーか、それともITかを悩んだ末に、IT業界に入ることに決めました。

私にとってなかなか難しい決断でしたが、「一つを選ぶと、他の選択肢を放棄しなければならない」いわゆるトレードオフの覚悟でしたので、入社してから、IT資格の取得、業務知識の理解、業界動向の収集などに没頭しました。最初は、分からないことばかりで、しかも、同期の殆どはIT専門や情報通信科からの卒業生だから、様々な技術書、資格対策本、仕様書とにらめっこしながら、ストレスと戦う毎日を送っていました。

「努力は必ず報われる。」とよく言われますが、まさしくその通りです。取得した資格と参画したプロジェクトがどんどん増えるにつれ、自信がかなり付いてきました。社会人6年目の時、新天地を求めて、関西を拠点とする大手電力会社のシステム子会社へ転職を果たしました。

業界は同じですが、業務知識はほぼゼロの状態での出発となりましたが、それでも、新人の頃実践した方法で、一筋に、一心不乱に勉強しながら、目の前の業務をこなす日々を過ごしています。

実は、私の中に、当初諦めざるを得なかったメーカーと商社の仕事を一度やりたいとの気持ちはまだあります。人生は一度きりで、もし今の仕事を辞める時が来れば、次は、悔いを残さないように、同じ業界ではなく、前からやりたかった分野でチャレンジしたいと思います。

みなさん、もし私と同じように、やりたいことが多分野に渡って複数ある場合、同時にこなそうとせず、まず一つだけに集中して、ある程度のレベルに達して、これ以上満足感が得られないと感じた時に、その他の目標に切り替えて一からスタートしたほうが、どちらも中途半端に終わることなく、満足感と達成感を思う存分に味わえるのではないかと思います。いかがでしょうか。

《留学、海外研修》

★ネヴァダ大リノ校より

3年 清水 咲紀

こんにちは。私は、今年の7月からアメリカのネヴァダ大学リノ校で約1年の派遣留学をしています。留学が始まって約4ヶ月。こちらの生活にもすっかり慣れ、充実した日々を送っています。ネヴァダ州リノは、州内ではラスベガスに次ぐ第2の都市で、カジノが有名です。高地砂漠に位置し、あたりは山に囲まれていて、夏の暑さと冬の寒さが厳しいです。1日の気温差が激しく、さらに乾燥もしているので、この気候に慣れるまで苦労しました。リノは自然が多く、観光地がたくさんあるわけではありませんが、その分毎週のように様々なイベントが開催されているのが特徴だと思います。参加す

るたびに新しい出会いや発見がありました。また、大統領選の投票日直前に迫っているため、キャンパスの至るところに"VOTE!"と書かれた看板が掲示されており、ムードが高まっています。私もネット等でその動向に注目しています。

私は大学から徒歩5分のシェアハウスに住んでいます。3人部屋で、スリランカ人とアメリカ人学生がルームメイトです。中国人と台湾人が別部屋に住んでいます。皆とても明るく、毎日笑顔が絶えません。家では私以外に日本人がいないので、もちろん会話はすべて英語です。最初は私だけ会話についていけず、辛い思いを何度もしました。ですが、勇気を出して会話を止め質問すると、ハウスメイトが優しく教えてくれます。毎日のちょっとしたことがすべて勉強になっています。毎週日曜日には、私が住む家でサンデーディナーがあり、他のシェアハウスの住人や地元の人と交流しながらディナーを楽しんでいます。互いの考えを尊重しながら行動し、時には間違いを指摘する...文化や習慣が異なる人と共同生活を送ることは決して簡単なことではありません。しかし、こういった日本ではできないような異文化体験ができるのがシェアハウスの醍醐味の1つだと思いますし、すでにここを選んで良かったと感じています。

秋学期は留学生用の英語のクラスを2つ、アカデミックのクラスを2つ受講しています。私は金沢大学英文コースのクラスの中でも、とりわけアメリカ文学のジェンダーや人種問題に興味があるため、**Social Movement of Gender, Race, and Identity** というクラスを選択しました。このクラスでは、アメリカの市民権運動での活動家や団体などのテキストを読み、ディスカッションをします。教授だけでなく、学生がディスカッションリーダーとして、事前にテキストを分析して質問を考え、クラスを作るというグループ発表も行います。現地学生は自分の意見を

しっかり持っていて、自分から率先してどんどん発言します。内容も難しく、毎度他の学生の積極性に圧倒されていますが、少しでも理解できるよう努力しています。また、Native American Culture and Identity というクラスも受講しています。このクラスでは、ネヴァダ州に住むネイティブアメリカンの歴史をテキストや映画を通して学び、ディスカッションを行っています。どちらのクラスもアメリカならではの内容で、他学生に比べて背景知識に疎い分、理解するのが大変ですが、非常に興味深い内容ばかりです。英語学の講義は、時間割の都合上、今学期は受講できませんでしたが、来学期に機会があれば挑戦してみたいと思っています。

周りのアメリカ人には熱心なクリスチャンが多く、食事の前は手をつないで祈り、毎週月曜日には教会に行きます。私はクリスチャンではありませんが、時間に余裕があるときはシェアハウスのオーナーと教会に行っています。また、私は月に2回 Bible Study という、キリスト教の歴史や聖書の内容を学ぶ勉強会に参加しています。毎日クリスチャンとともに過ごすことで、彼らの考え方をさらに学んでみたいと思うようになったからです。頭の片隅にあった高校の世界史の知識と結びついたとき、アカデミックのクラス内容を理解する際に役立ったときには感動しました。キリスト教の知識はアメリカの歴史を学ぶ上で必要不可欠だと感じた瞬間です。

秋学期も折り返し地点。まだまだ成長できていない、もっといろいろなことに挑戦してみたい、と若干焦りを感じていますが、自分らしく、悔いの残らないように、後の7ヶ月も頑張ります。

★アメリカ古書協会を訪れて

平成9年度卒業 大野 瀬津子

この夏アメリカに行った。目指すはアメリカ古書協会 (American Antiquarian Society)。1876 年までにアメリカで書かれた本はおよそ何でも所蔵している、という古書マニア垂涎のアーカイブだ。目下、アメリカの大学を舞台にした小説を研究する身。しかし 19 世紀に出版された初期の大学小説は、なかなか日本では手に入らない。そこで今回の調査旅行となった。この古書協会はマサチューセッツ州のウスターという町にある。事前に調べてみると、残念ながらウスターソースとは無縁の町、かなり治安が悪いという。ちょうどバングラデシュやニースでのテロ事件が連日メディアを賑わし、アメリカでも白人警官による黒人の射殺や関連する暴動が取り沙汰されている頃だった。しかも今回は全くの一人旅。元来不安症の私は、行く直前まで不安で眠れぬ夜が続いた。いつも学生には口を酸っぱくして海外一人旅を薦めているくせに、我が身となると話は別なのである。

しかし蓋を開けてみれば、怖い思いなど一度もすることはなかった。滞在したのは古書協会から徒歩 15 分のホテル。丸々一週間、資料調査に明け暮れた。まず古書協会の受付で名前を記入してからリーディング・ルームに入る。調べたい資料のリストをリクエストする。ライブラリアンが資料を出してきてくれる。どんな資料もデジカメで撮り放題、というのが嬉しい。もちろん無料である。貴重な資料を多数入手することができた。つくづく感心するのは、ライブラリアンやアーキヴィストが本当に親切なことだ。彼らはこちらの要望に出来る限り応えようとしてくれる。様々なライブラリアンの方々が入れ替わり立ち代わり、リサーチを手助けしてくれた。その他、いつも声をかけてくれた受付のおじいちゃん、

ロッカーの鍵が開かずアタフタしている私を助けてくれたウスター工科大学の歴史学教授など、みんな優しく接してくれた。孤独な調査旅行を無事に、それも首尾よく終えることができたのは、現地でお世話になった皆さんのお陰である。

思い返せば、私にとって初めての海外経験は、金沢大学時代のアメリカ留学に遡る。旧文部省の派遣交換留学生としてウィリアム&メアリー大学で過ごした10ヶ月間は、人生の転機になった。それまでの常識が一切通用しない異文化のなかに一人投げ込まれ、人間関係は一からスタート、おまけに得意なはずの英語もうまく使いこなせない。そんな状況のなかで、初めて自分の性格や日本文化を客観視できるようになったように思う。異文化に対する強い興味も芽生えた。もし留学していなければ、研究の道に進むことはなかったかもしれない。読者の中には、不安から海外行きをためらっている学部生や大学院生もいるだろう。そんな皆さんに声を大にして言いたい。ぜひとも心が柔軟な若いうちに海外一人旅や海外留学をして欲しい。不安に打ち勝って海外に出れば、必ずや収穫がある、と。誰より心配性の私がいうのだから、間違いない。

《大学院で奮闘中》

★金沢で学び続ける今

人文学専攻1年 荒井 悠翔

私は尊敬する先生方や心優しい先輩方、そして共に学びあう同輩の友人に囲まれ、四年間、金沢大学で英語学を学んできました。そして四回生のとき、進路選択の折に自分がまだ「教師になる」という夢を叶えるには実力が足りていないという自覚、目の前に広がる学問の世界を捨てたくないという思い、そしてこの恵まれた環境で学び続けたいという思いが重な

り、私は同じ金沢という地で大学院に進学することを決めました。

そうして忙しく過ぎる時の中、気づけばもう年が変わろうとしています。毎日が「やらなければならないこと」と「やりたいこと」に囲まれていました。ですが私はいつも前向きに「やる」という選択を続けてきました。私が前向きでいられたのもすべて先生方、先輩方の応援があつてこそでした。それに加え、未だ私の目の前には学問という「知りたいこと」に溢れた世界が広がっているため、毎日がとても充実していて仕方がありません。「井の中の蛙大海を知らず」ということも言われますが、私にとって金沢という井戸の中はこれほど広いところはない程の大海であります。

さて、私は今、“I understand.”や“I see.”と言った「了解表現」と呼べるような英語の表現について研究をしています。日本語についても「分かった」と一言で表されることの中に、一体何が起きているのか。英語について言えば、“OK”や“Alright”、“I understand.”というように、表現がそれぞれ区別して用いられている。それぞれの使用の場においてそれぞれ異なった認知がされているのであれば、それはきっと面白いことだ！と思い、私はこの研究を始めました。そして少なくとも今、「分かる」ということの蓋を開いてみただけでもそれは中々簡単に「分かった！」と言えるようなことではないことが分かっています。研究においては未だ「分かるということが分からない」、そういった矛盾と皮肉の壁に直面し続けています。ですがこの今でさえ、これこそ研究の面白みだと強く思うのです。

私が知らぬうちに時はやはり過ぎていたようで、私が学部生の頃から厚くお世話をしてくださった中村先生がご退官されます。見返したい！という思いはあるにはあるのですが、やはり私は研究の成果でどうか恩返しがしたいと思っています

す。いつか中村先生をして「なるほど、分かった!」と唸らせたい。小さくも大きな夢が私にはあります。

★卒業して半年が過ぎて

—大学院での学び—

平成 27 年度卒業 根岸 加奈

今年の 3 月に英文を卒業してから早半年が経ちました。今春からは東京大学大学院教育学研究科・学校教育高度化専攻で学んでいます。ここでは理論と実践の統合がめざされ、現職の先生方も多く在籍しています。入学してからはとにかく分厚い洋書・和書を読んで方法論や実践例を学び、また机上にとどまらず定期的に小学校・中学校・高校を訪れ授業研究をしています。周囲のレベルの高さに圧倒されながらも、自分のずっと学びたかった分野を学べていることに幸せを感じる日々です。

私の研究テーマは、フィンランドの教師教育と、それがフィンランド人学生や教師にどう意識されているのかということです。過去 3 年連続で英文学会に出させて頂いているのでご存知の方も多いかもしれませんが、私は 2014 年から約 10 ヶ月間、フィンランドの教員養成大学に留学をしていました。ずっと英語教師になることが夢だった私は、教育で高い評価を受けるフィンランドを留学先として選びましたが、現地では教師教育のレベルの高さに圧倒されっぱなしでした。それから、自分が経験したフィンランドの教師教育についてもっと知りたい・伝えていきたいという思いから、大学院での研究テーマをそれに設定して日々取り組んでいます。つい先月も 3 週間、調査でフィンランドに滞在していました。

研究というのはわりと孤独な闘いであるのには間違いないのですが、私は周囲の方々に支えられて研究に取り組むことができています。私の所属するゼミには

25 名程が所属しているのですが、このゼミでは“全員が一人ひとりの研究に携わる”，そのプロセスが非常に大切にされています。それぞれが自分の研究について定期的に報告をし、そして全員が互いにアドバイスをし合うということをしています。現職の先生、他大学の教員、文部科学省の方、ストレートマスター、教育系企業の方など様々な人々がおり、それぞれが自身のバックグラウンドを活かし補い合いながら学びあっています。大学院に入り、人は一人では学べないということをもっと強く実感しています。一人で机上に向かうことももちろん大切ですが、それだけでは独りよがりの考えになってしまいます。他者と対話をして初めて気づけることもたくさんあります。同級生たちが社会に出て寂しくなっていますが、私は今与えられたこの素晴らしい環境に感謝して、自分にしかできない研究を大切にしながら、精一杯学び続けていきたいと思います。

★over との出会い

人文学専攻 2 年 石垣 恵一

2006 年 2 月 28 日、その日私は over との衝撃的な出会いを果たした。中学 2 年生の時である。このことは時間割などを記すために使用していた「生活記録ノート」に残っている。この生活記録ノートが私の人生の方向性を決めたといっても過言ではないだろう。

私は元々英語が嫌いであった。正確に言うと、小学生の頃の英会話の授業がどうにも嫌いであった。中学生になると英語は外国語活動から教科へと変わったからか、英会話は少なくなりむしろ文法重視の授業となった。そのためか私は英語が好きになった。

中学 2 年生になるとクラス替えがあり、担任が英語の先生となった。英語が好きになっていた私はそのことがとても嬉し

かった。あまりの嬉しさに、私は生活記録ノートを英語で書き始めた。少し気取った気持ちもあったかもしれない。さらに嬉しかったことは、先生が英語で返事を書いてくれたことだ。私が習った文法で、私が分かるように書いてくれた。私が書いた英語の文法、表現が間違っている時は、必ず訂正してくれた。この先生とのやり取りで、私は他の生徒よりも遥かに長い時間英語と触れ合うことができたに違いない。

先生との2年間のやり取りの中で、未だに心に残っているものがある。2006年2月28日、その日の日記に私は次のように記した。“I watched AIBOU with my father and my grandmother when we drank some cup of tea.” AIBOUとは刑事ドラマ「相棒」のことである。「紅茶を飲みながらお父さんとおばあちゃんと相棒を見た。」と書きたかったのであろう。中学2年生の英語としては上出来ではなかろうか。しかし先生は、“when we drank some cup of”の部分に線を引き、“over”と訂正した。そして余白に「overにはいろんな意味があって、「～しながら」って時にも使います。だから「お茶を飲みながら」はover teaでOK。覚えておくとかんたんでしょう？」と書いてくれた。これを読んだとき、私の体に感動という名の衝撃が走った。確かにoverという語は知っていた。しかし私の知っていたoverはthereと組み合わせることで「向こうに」などの意味を持つoverであった。overたった1語で「～しながら」という複雑な日本語を表現することができる。この時の感動は未だに忘れることができない。

なぜoverで「～しながら」という意味を表すことができるのか、当時はもちろん考えもしなかった。しかし今ならそれができる。overとの出会いを与えてくれた先生への感謝の気持ちを込めて、修士論文では、精一杯このoverと向き合いた

いと思う。

《出版しました》

★『謎とカーエリザベス朝悲劇の成立と変容』(英宝社、2016)の上梓にあたり

金沢大学名誉教授 三盃 隆一

10月下旬のある日、中村先生より今回の拙著についてKESのNews Letterに寄稿依頼の電話がありました。その際「献本させていただいた方々に同封した挨拶文と同じものでよい」という事でしたので、そのままここに記載させていただきました。

「本書は、歿後400年のシェイクスピアを中心に、彼の同時代劇作家—キッド、マーロウ、ウェブスター、ミドルトン、ターナーの悲劇作品を精読することで『エリザベス朝悲劇の成立と変容』の謎に迫ろうとしたものです。『本書の基本方針』や『あとがき』で書きましたように、本書は大学における講義や演習を基にした『教室のシェイクスピア』の実践報告的な側面がありますので学生や、エリザベス朝悲劇について予備知識のおもちゃでない一般読者にも興味や関心をもってもらえることを目指しています。とはいえ、実際に執筆してみると殆ど毎回の講義は、最新の研究成果についての考察を踏まえた上でエリザベス朝悲劇の謎或いは魅[魔]力の解説を目指すという、これまで発表してきた筆者の論文の内容と不可分の関係にあることが改めて確認できました。その意味で少し大仰な表現をすると、これは筆者のおよそ半世紀に及ぶエリザベス朝悲劇研究の総決算であるといえるかもしれません。専門的な内容を教養レヴェルに置き換え、教養的な内容を専門レヴェルの知識で裏打ちすることで、専門と教養の融合を図ろうとしたつもりです。井上ひさしの「むずかしいことを

やさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく」伝えることこそ、およそ文学研究に携わる者が目指すべき理想であると思います。至難の業ではありますが、考えてみれば、それを戯曲という形で実現したのが井上ひさしであり、そして誰よりもシェイクスピア本人であったはずです。カルチュラル・スタディーズや上演批評が隆盛を極めている現在、基本的にテキストの精読を第一義的に目指す批評は時代遅れの誹りを免れないかもしれませんが、優れた演出家エドリアン・ノーブルの『役作りのための主要な情報は常にテキストの中に書かれており』、『グローブ座の観客は主として芝居を聴きに劇場へ行った』という言葉は、筆者の本書での手法が必ずしも的外れではないことを示唆しているようでもあり勇気づけられます。

本書の執筆にあたり、外国はもとより日本の研究者の研究書から様々なことを学び、その多くを引用させてもらいましたが、そのせいもあって頁数も当初の予定を大幅に超えるものとなってしまいました。『本書の基本方針』か『あとがき』だけでも、或いは関心のおありになる作品を論じた一章だけでもお読みいただければ、十分光栄です。ご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

★英文学からの放浪と回帰

—アートとケアの物語—

金沢美術工芸大学名誉教授 横川 善正

今秋、筑摩書房から『ホスピスからの贈り物、イタリア発、アートとケアの物語』（ちくま新書）を上梓致しました。これは2005年の拙書『誰も知らないイタリアの小さなホスピス』（岩波書店）の続編にあたるものです。長年、金沢美大というアートの現場で英語教育にかかわっていた筆者が、いつのまにか終末期医療（ホスピス）といったケアの分野に

心を奪われた、いわば「放浪と回心の物語」です。帯文にあるように、ありきたりの「生き甲斐」を追い求めるのではなく、「死に甲斐」のなかにあたらしい時代の価値をつくろうというのが、編集者との一致点でした。

ホスピスは、近代のインフラの代表格である病院が見落とした部分を補う医療施設として、20世紀の後半にかけて欧米でうまれました。「死んでしまえばそれで終り」と見切ってしまうのではなく、逝く人だけでなく生き続ける人にとっても、いっしょに過ごす最期を濃密な生の時間帯とみなす良医たちによってつくられた、ある意味では極めて高踏な精神的な空間です。同時にこれは、進歩、発展、合理化、競争を掲げたモダンに対する反省に立って歩みだしたポスト・モダンの「前衛作品」とも呼ぶべきものでした。本著のテーマとなった「ターミナル・アート」は、筆者の造語ですが、ホスピスという覗き窓をとおして、芸術をはじめとする近代の制度化された社会の枠組みを相対化し、新しい美学と芸術運動を構築するためのマニフェストです。

筆者が幸運にも、英語教師として最初に赴任したのが金沢医科大学でした。そのとき、恩師であった故山田梁先生から紹介されたのが、ロバート・バートン（Robert Burton 1577-1640）の『憂鬱の解剖』（The Anatomy of Melancholy）でした。「メランコリー」は詩の前触れを掴まえる心情である、そして英文学には時代を超えて訴える深い精神世界があるから、しっかりと行間を読んで、今という時代を映す鏡にしないで、と言われたのを思い出します。その後、美大に移るときに薦められたのがジョン・ラスキン（John Ruskin 1816-1900）の『ヴェニス の石』（The Stones of Venice）でした。思い返すと、イタリアのホスピスに至るきっかけは、そのなかの一文、「ゴシックの美しさの根源にあるのは不完全さを楽

しむころ」でした。

上記の本のテーマとなった「アートとケアの物語」は、あのかの山田先生からの「託宣」をなぞっているのかもしれませんが。文学と絵画、詩、音楽、そして芸術と医学、宗教など、既存のジャンルが接し合うところの豊かさを、もう一度英文学をとおして創造的にじっくりと読み返す時がやってきたのです。

★『ことばの実際 1—話しことばの構造』
(シリーズ 英文法を解き明かす—現代英語の文法と語法、第9巻) (研究社、2016)

金沢大学教授 澤田 茂保

はしがきにも書いたが、コミュニケーションを教育目標に置く時代には、学生時代に教わった文法知識が有効に働かないことがある。正しく書かれた英語を読むことを目標にした文法と自分の意思を何とか伝えることを目標にする文法とには当然ずれがあるからだ。英語教員ですら、コミュニケーションの時代には文法はいらない、といった考えを持つ人もいる。果たしてそうなのか、という問題を提起しようと思った。内容は本書に譲って、裏話でも書こうと思う。

英語学研究では書籍から事例を収集することが多い。しかし、本書では当初から分析対象として、ダウンロード可能な海外ラジオドラマと *English Journal* のインタビューデータを使った。実は、ラジオドラマは視覚情報がないので、映画などよりもはるかに英語学習に有益である。良い映画になればなるほど、言葉よりも役者の表情やしぐさが「ものをいう」からである。この時に困ったのは、結局コピーライトの件であった。出版社によると書籍や映画などの利用には実績があり、ある種の慣例や出版社間の相互依存があるので、仁義を切れば通常は問題がない。だが、海外から直接入手する資料

を利用する場合、事例引用した個々の著作権者（音声を発した人）から許諾をとる必要があるのか、といった問題である。アルク社によると、EJ のインタビューはほとんど二次使用の許諾権限が契約上ない、とのことで、ある意味で行き詰まった。出版社の指示もあり、この問題は棚上げにしてスタートした。研究社は脱稿後にいろいろ検討してくれて、社内で法務関係も交えて議論した上で、最終的に go ということになったようである。もし裁判になれば、会社として受けて立って、英語教育の専門図書での利用について主張する、ということであった。もしこれで負ければ、例えば、海外のニュースをタブレットで聞いて、その表現を英語学研究に利用する、といったことができない。それでは、いつまでたっても *spoken language* の研究に前進がない、ある意味で試金石だから、ということで出版の運びとなった。私もかりに絶版となっても、いま世に問う意味はあると思った。

もう一つ。ラジオドラマにはスクリプトはなく、直接音声を起こした。ABC ニュースを使った授業の自主教材作成で慣れており、やり甲斐があった。いつかドラマを教材に、などと思っていた。しかしながら、今年から金沢大学の共通教育が共通シラバスとなった。そのため ABC の授業ができなくなった。共通シラバスは教員の創意工夫を奪う。私としてはそれが残念なのであるが、果たしてそれでよいのかな、と疑問も感じている。

《平成27年度卒業論文題目》

相澤真井 The Structure of Irony in the Conversation: Compared with Flattery and Joke

荒井悠翔 The Analysis of Inner Variety of 'Understanding' Expressions: Seeing What is Understood

井上 爵 A Study of First-Person in
Humor

甲斐 彩加 American Dream in *The
Great Gatsby*: A Study of the
Conflict Between West Egg and
East Egg

北口真帆 The Use of Stative Verbs
in Progressive Forms: Focusing on
their Syntactic and Semantic
Features

木村美里 The Analysis of the
Japanese American Family and
Gender described in Hisaye
Yamamoto's Stories

酒井大輝 A Study of Japanese
Metaphorical Expressions in Our
Daily Life

佐々木美帆 The English Onomatopoeia
in Manga Comics: By Comparing
English Onomatopoeia to Japanese
Onomatopoeia

高橋 遼 A Study on Aspect in
English and Japanese

塚田結衣 A Study of the Semantic
Differences between *No More Than*
and *Not More Than*

転正彩香 On the Differences of the
Way of Thinking of Politeness
between Japanese People and
American People

根岸加奈 Dialogic Pedagogy in
English Classes in Finland

吉野沙紀 Exploring Japanese Ways
of Thinking with the Ideas of
"Kawaii"

一瀬暁子 *Pulp Fiction*

藤野有紀 An Analysis of *The
Remains of the Day* of Kazuo
Ishiguro

柳原理沙 An Analysis of the Vague
Relationship between Victor and the
Monster in *Frankenstein*

《 平成 27 年度修士論文題目 》

村澤佑介 Wordsworth and Suspension of Mourning

茶谷丹午 The Ethical Thought of
Lafcadio Hearn

長谷川あおい The Study of 'Possibility'
-ty' in English Modalities: *Can*,
May, *Could*, and *Might*

藤井志帆 Cognitive Analysis of
Asymmetric Phenomena in the
Particles *Up* and *Down*

《 平成 27 年度博士論文題目 》

小林 隆 Discourse Marker *I mean* :
A Cognitive Linguistic Approach

《 在学生の状況 》

< 学生数 >

2 年生 9 名 (男性 5 名、女性 4 名)

3 年生 16 名 (男性 7 名、女性 9 名)

4 年生 16 名 (男性 6 名、女性 10 名)

院生

修士課程 4 名 (男性 2 名、女性 2 名)

博士課程 5 名 (男性 3 名、女性 2 名)

< 過去 3 年間の派遣留学先 >

シェフィールド大学、セントラル・ラン
カシャー大学 (英国)、ダブリンシティ大
学 (アイルランド)、ウィリアム アンド
メアリー大学 (米国) ネヴァダ大学リノ
校 (米国)、ユバスキュラ大学 (フィン
ランド)、ゲント大学 (ベルギー)、カレル
大学 (チェコ)

学類全体の傾向ですが、公務員を希望する学生が多いためか、派遣留学を希望する学生が減少傾向にあります。

＜過去3年間の主な就職先・進学先＞

石川県教員、群馬県教員、石川県庁、金沢市役所、白山市役所、金沢大学職員、(株)郵船ロジスティクス、その他民間企業など

金沢大学大学院、東京大学大学院、京都大学大学院など

今年は、就職活動の解禁時期による混乱も昨年ほどではなく、就職の内定状況も概ね良かったようです。

＜平成27年度（11月～3月）及び28年度の院生による研究発表等＞

◆平成27年度（後半）研究発表

・2015年度金沢大学英文学会

(11月28日：金沢歌劇座)

藤井志帆 「up/downにおける意味拡張」
山田美紀 「did you ever 疑問文の傾向」
長谷川あおい 「英語法助動詞の「可能性」用法についての考察」

村澤佑介 「ワーズワースと死の否認」
茶谷丹午 「ラフカディオ・ハーンにおける倫理性と怪奇趣味の関連について」

・日本語用論学会第18回大会

(12月5-6日：名古屋大学)

小林 隆 「CDSの射程—談話標識 I meanの新しい例からの検証—」

◆平成27年度（後半）研究論文

・Kanazawa English Studies 第29号

中谷博美 「初期近代英語における付加疑問文の特徴—Shakespeare 全戯曲の分析から—」

向井理恵 「前衛表現に現れる「間」—オクシモロン・パロディを例に—」

◆平成28年度 研究発表

・日本英文学会中部支部第68回大会

(10月15日：富山大学)

・シンポジウム『文法化を問う—構文化をも考慮して—』(中村芳久代表)

高島 彬 「証拠性 (Evidentiality) の文法化について」

・研究発表

石垣恵一 「Tyler and Evans(2003)における over の期間用法の考察」

◆平成28年度 研究論文

・日本認知言語学会論文集第16巻

高島 彬 「日本語のモダリティと実在性に関して—「そうだ」における「様態」と「伝聞」—」

中谷博美・屈 莉 「語気詞と反復疑問文の認知的考察—中国語・英語・日本語の機能的構造分析による言語類型—」

・日本英文学会中部支部第67回大会 Proceedings

向井理恵 「日本語と英語のテキストと語り～「同化」と「異化」の観点から～」

《2015年度会計報告》

以下の会計報告は、1月の総会に諮られます。

2015年度金沢大学英文学会会計報告

(2015年4月1日～2016年3月31日)

	会計 会計監査	正木恵美 西多喜代子
収入		2,710,516 円
(内 前年繰越金		2,286,044 円)
支出		240,502 円
2016年度への繰越		2,470,014 円

【収入内訳】	(円)
2015 年度 KES 会費	
（在学生分、総会時支払分、振込分）	
	192,000
維持費	136,000
懇親会費	96,000
利子	472
小計	424,472
2014 年度繰越	2,286,044
合計	2,710,516

【支出内訳】	(円)
ニューズレター発送関連	90,428
2015 年度総会関係	
お茶代・花代・備品	9,064
総会施設利用料(金沢歌劇座)	24,370
懇親会費	116,640
合計	240,502

《 事務局より 》

1. 会費の納入について

同封の振込用紙にて、2016 年度会費 2,000 円の納入をお願い致します。ぜひ、会費と共に維持費（一口 2,000 円）もよろしくお願い致します。

これまでご納入頂いてない方も、当学会の運営状況をご理解の上、何卒ご協力のほどお願い申し上げます。

○会費・維持費等の振込先：

ゆうちょ銀行

口座記号：00720-6

口座番号：16171

加入者名：金沢大学英文学会

2. 総会、懇親会の出欠について

同封の葉書(S55年卒までの方に同封)、または E メールにて、総会及び懇親会の出欠を 1月16日(月)までに事務局まで

お知らせ下さい。その際には、ご氏名(旧姓)、卒業(修了)年、ご住所、(お葉書の方は)メールアドレスをご記入願います。また、ご近況もぜひお書き添え下さい。頂いたお葉書(メール)は、大事に保管し、総会時に閲覧できるよう受付に置いておきます。どうぞよろしくお願い致します。

*金沢大学のゲストハウスにまだ少し空きがあります(12月20日現在)。宿泊をご希望される場合は、1月13日までに事務局宛にメールにてご連絡ください。(予約は外部からはできません。シングル 3100 円～)詳細は以下のサイトにてご確認ください。

<http://guesthouse.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

3. KES 29 号、30 号について

発行が遅れておりました KES29 号が刊行されました。つきましては、過去 3 年間に一度でも会費を納入してくださった会員の皆様に、今回、ニューズレターと一緒に送っております。

3 年間会費が未納の方で、KES29 号をご希望の場合は、事務局までご連絡の上、今年度分の会費と合わせて、維持費あるいは前年度分の会費の納入をお願いします。

次号 KES30 号に関しましては、1 年遅れますが、＜中村芳久先生退職記念号＞とし、2017 年度内の発刊を目指します。ご投稿を希望される方は、2017 年 3 月 31 日までに事務局まで、その旨ご連絡下さい。先生との思い出もぜひお寄せ下さい。原稿締切は、2017 年 11 月 30 日です。

4. メール会員登録のお願い

メール会員を募集しております。メール会員の方には、ニューズレター、研究会や同窓会などのお知らせを、いち早くご連絡させていただきます。ご希望の方は、登録されるメールアドレスを金沢大学英文学会事務局までお知らせください。

【連絡先】 金沢大学英文学会事務局
E-mail : kesoffice.kanazawa@gmail.com

《 編集後記 》

◆総会プログラム・ニューズレター発送にあたり、住所（転居先）不明の方が増えてきております。住所変更等ありましたら、お手数ですが、事務局までご連絡下さい。

◆金沢大学英文学会役員(H29年3月まで)

会長	中村芳久
副会長	谷内輝雄
事務局	堀田優子・川畠嘉美
会計	正木恵美・屈莉
監査	西多喜代子
将来計画委員	高田茂樹、和泉邦子他
KES 編集委員	堀田優子他
広報委員	柳川三千代
運営委員	柿崎謙一、市川泰弘、小林隆
院生委員	
	高島彬、向井理恵、中谷博美、 廣田篤、茶谷丹午、西門綾子、 山田美紀、石垣恵一、荒井悠翔

今年度の KES は例年より 2 ヶ月遅れの 1 月開催となり、NewsLetter 第 8 号が届くのを心待ちにしていらっしゃった方々にはご心配をおかけしました。

遅ればせながら、今号も皆様の恩師や先輩、後輩の活躍ぶり、充実した様子、奮闘記などが詰まった内容をお届けすることができました。同窓の皆様の文章からあふれ出るエネルギーを励みに、自分も一つひとつ、歩みを進めていきます。

中村芳久先生がご定年を迎える 3 月が迫り、今回の KES は会長職最後の回となります。学部、ブランクを経ての大学院生活、そして現在に至るまで、合計すると 20 年近くお世話になっている、自称「愛弟子」としては、まだまだ実感がわきません。学ぶことの楽しさ、ことばそのものの奥深さやことばを生み出す人間のおもしろさを私たちに伝え、学問的刺激を与え続けてくださった中村先生に、今後の教員生活・研究生生活を通してどのように自分なりの恩返しをしていけるのか、思いを巡らせているところです。

(川畠)

金沢大学英文学会ニューズレター No. 8

2017 年 1 月 1 日発行

〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学人文学類 英語学英米文学研究室
金沢大学英文学会
代表者 中村 芳久

E-mail : kesoffice.kanazawa@gmail.com
URL : <http://english.w3.kanazawa-u.ac.jp/>